

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成 22 年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター
(韓国) 拠点機関：	高麗大学校
(中国) 拠点機関：	中国社会科学院
(台湾) 拠点機関：	中央研究院
(シンガポール) 拠点機関：	国立シンガポール大学

2. 研究交流課題名

(和文)： アジア比較社会研究のフロンティア
(交流分野：社会学)

(英文)： Frontier of Comparative Studies of Asian Societies
(交流分野：Sociology)

研究交流課題に係るホームページ：<http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/aasplatform/index.html>

3. 採用年度

平成 22 年度 (1 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：東洋文化研究所・教授、所長、羽田正

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：情報学環、東洋文化研究所・教授・園田茂人

協力機関：新潟県立大学

事務組織：東京大学東洋文化研究所総務チーム(研究支援担当)

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国(地域)名：韓国

拠点機関：(英文) Korea University

(和文) 高麗大学校

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Sociology, Professor, Yoon In-jin

協力機関：(英文) Yonsei University

(和文) 延世大学校

(2) 国(地域)名: 中国

拠点機関: (英文) Chinese Academy of Social Sciences

(和文) 中国社会科学院 コーディネーター (所属部局・職・氏名): (英文)

Institute of Sociology, Director & Professor, Li Peilin

協力機関: (英文) Fudan University

(和文) 復旦大学

協力機関: (英文) University of Hong Kong

(和文) 香港大学

(3) 国(地域)名: 台湾

拠点機関: (英文) Academia Sinica

(和文) 中央研究院

コーディネーター (所属部局・職・氏名): (英文) Institute of Sociology, Director &
Professor, Hsiao Michael Hsin-huang

協力機関: (英文) University of Taipei

(和文) 台北大学

(4) 国(地域)名: シンガポール

拠点機関: (英文) National University of Singapore

(和文) 国立シンガポール大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名): (英文) Department of Sociology, Associate
Professor, Tan Ern Ser

協力機関: (英文)

(和文)

5. 全期間を通じた研究交流目標

東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センターは 2010 年度から共同利用・共同研究拠点となり、外部に開かれた研究機関としての第一歩を踏み出すことになった。同センターは造形資料学分野と比較文献資料学分野を中心に人文学的研究を専門的に行ってきたが、2009 年度にアジア社会・情報分野が新設され、アジアで行われてきた社会調査の比較分析を軸とした、新たな研究領域の開拓に取り組みつつある。

同センターの研究基盤を強化するため、本事業を通じて、(1)新しい研究領域の開拓を推し進め、従来データベースの欠如ゆえに本格的に展開されることの少なかったアジアを対象にした比較社会学的研究を進めるとともに、(2)データ分析を通じた新たな事実を明らかにしたい。アジア・バロメーターを用いた分析から、職業カテゴリーによって定義される中産階級は、高学歴の若年層によって形成されている点で共通しているものの、その政治的態度という点ではアジア内部で共通点が見られなかったり、一般的幸福感に及ぼす家族生活に対する満足度の影響という点からみると、日中韓の東アジアと、それ以外の東南アジアとでは大きな違いがあることなどが発見されたが、同種の新しい知見をアジアの研究者と共同で「発掘」してゆく。

同時に、(3)学内外の諸機関と連携しながら、現在進みつつある東アジア域内での社会学研究者の交流を加速させ、(4)2014 年に横浜で開催予定の世界社会学会議で、日本及び東アジアにおける社会学研究のプレゼンスを高める土台づくりを行うことを目的としている。こうした作業を進めるためには、アジア域内で比較可能なデータベースを構築し、これらのデータを利用した共同研究を進めるとともに、その成果を積み上げていく作業が必要とされる。同センターでは、猪口孝教授（現・新潟県立大学学長）や田中明彦教授（現・東京大学理事）を中心に 2003 年からアジア・バロメーターが実施され、2008 年に至るまで膨大なデータ蓄積を行ってきたが、本事業では、これらのデータベースを有効に活用するとともに、上記の 4 つの目的を達成するための諸作業を行う。同時に、アジア社会学コンソーシアムによるセミナーへの参加、アジア比較社会共同研究会への参加及びそこでの報告、アジア・バロメーター共同研究会への参加及びそこでの報告といった 3 つの方策をとることで若手研究者の育成に努めたい。

6. 平成 21 年度研究交流目標

平成 22 年度から開始

7. 平成22年度研究交流成果

7-1 研究協力体制の構築状況

本交流を進める以前の段階、とりわけコーディネーターが前任校の早稲田大学大学院アジア太平洋研究科で、グローバルCOEプログラム「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」を事務局長として動かしていた当時から、高麗大学校や国立シンガポール大学とは、共同でシンポジウムを開くなどの交流をもっていた。しかし、本プログラムの推進拠点である東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センターは、従来人文系のデータアーカイブ作りをメインにしていたこともあって、社会学を軸にした交流はまったくといってよいほど行われておらず、コーディネーターの着任以降は、2010年2月に中央研究院社会学研究所と交流協定を結ぶなど、部分的に研究協力体制は作りつつあった。

ところが本プログラムの採用とともに、ユニラテラルな関係に発展しており、各国の拠点機関の中軸的メンバーが、本プログラムの有用性を理解する中で、その研究協力体制は強固なものとなっていった。特に高麗大学校の場合、韓国におけるCOEプログラムに相当するBK21を受けていることもあって、12月に実施された2つの研究会のホスト役をうまくこなしてくれた。プロシーディングスの作成はこちらで行ったが、プログラムの印刷や会議室の手配、2日分の弁当の支給、レセプション代やセッションの合間の休憩のコーヒー代の負担など、財政的な面での支援も惜しまなかった。

また、中央研究院社会学研究所（台湾）の場合、われわれのプログラムに対応できるように臨時の研究チームを作ってくれ、若手4名と所長からなるチームが、その時々に応じて若手研究者を派遣する形で対応してくれるようになった。上海の復旦大学では、若手研究者の派遣をバックアップする形でインフォーマルなセミナーが開かれ、参加者はワークショップでの報告の前に、学内の学生から厳しい批判を受けてワークショップに参加しているが、担当教員は「このプログラムが始まってから、学生たちのモチベーションがまったく違う」と感謝されている。

このように、各協力機関によって状況は少し異なっているものの、総じて協力体制の構築が拠点機関・協力機関に肯定的に受け止められている。

7-2 学術面の成果

4. との拠点機関との共同プロジェクトの推進には、何かとコストがかかるが、本プログラムに関しては初年度から大きな学術的成果を得ることができた。2011年3月31日から4月3日まで、ハワイ（ホノルル）の Convention Center で開かれたアジア研究学会（Association for Asian Studies）の第70回年次大会で初めて導入された F. Hilary Conroy Award に、われわれのプログラムの成果を総括したパネル 251”Understanding Asian Societies through AsiaBarometer: Challenges of Quantitative Analyses”が、授賞対象と

なったのである。

以下、年次大会の Addendum に掲載された Special Announcement を掲載する（下線部は引用者）。

The F. Hilary Conroy Award

The F. Hilary Conroy Award is a new panel proposal award initiated this year to honor Prof. F. Hilary Conroy, outstanding scholar of Japan, Northeast Asia, and Asian American history at the University of Pennsylvania from 1951 to 1990. The Award is intended to encourage proposals to the AAS of panel topics that are grounded in Northeast Asia, but that are genuinely transnational and extend beyond one nation; and to help make possible the participation of more panelists from Asia or other parts of the world beyond North America. Finally, the Award recognizes academic excellence of a panel that meets the above criteria.

The Program Committee is pleased to announce the selection of Panel 251, "Understanding Asian Societies through Asia Barometer: Challenges of Comparative Quantitative Analyses," organized by Shigeto Sonoda, as the winner of this inaugural Conroy Award. The panel was awarded \$1,000 and is highlighted on page 78 of the Conference Program.

(<http://www.asian-studies.org/Conference/Program/Addendum-Online.pdf>)

このような賞を受けたのも、本プログラムが目指す挑戦的なアジア比較研究の重要さが AAS の理事長／理事たちに認識されたからであり、本プログラムの学術的貢献への期待の高さの表れに他ならない。

今後、研究成果として出されてペーパーは、ブラッシュアップして各国の主要ジャーナルに投稿されることになるが、その評価については、現時点で行うことはできない。

7-3 若手研究者養成

上記のパネルに参加して報告したのは、20代後半から30代前半の若手研究者であり、2名は大学院生（周倩と石岡亜希子）、2名はテニユア・トラックに乗る前の助教授クラスの教員（高麗大学校の Fabian J. Froese と中央研究院社会学研究所の Lee Zong-rong）である。これも、本プログラム、特にアジア・バロメーター共同研究会で拠点機関や協力機関から若手研究者に参加を求めよう、要請してきたからであり、その意味でも F. Hilary Conroy Award の受賞は、若手研究者養成を目指した本プログラムにとっても意義あることだった。

もっとも、シンガポールと台湾は、博士号取得以降のテニユア・トラックに乗っていない研究者を重視し、韓国と中国は、大学院生レベルの若手を重視しているなど、各国によって「若手」の条件および考え方が異なるが、だからといって本プログラムのもつ若手研究者養成のミッションが損なわれているわけではない。

7-4 社会貢献

人文社会系のプログラムで「社会貢献」といって明示できるものは少ないが、東アジアの社会学者コミュニティでの「アジア認識」に本プログラムが影響を与えているのは確かである。2010年12月に高麗大学校で行われたアジア比較社会共同研究会に参加した、中央研究院社会学研究所の張茂桂・副所長は、私信で”I myself have gained a great deal of

“thinking of Asia” in last two days. I am very much encouraged by your energy and visions with the projects”と書いてくるなど、同研究会に参加した社会学者にとって、アジアを考えるとという方向性が新鮮で、新しい可能性を感じさせるものだったと評されたのは、本プログラムの社会貢献を考える上で重要な点だと考える。

7-5 今後の課題・問題点

以上のように、大変に順調に本年度のプログラムは進んできた。今後の課題・問題点があるとすると、以下の2点である。

第一に、来年度国立シンガポール大学で開催を予定しているアジア・バロメーター共同研究会が実施されるかどうか、若干不確定な部分が残っている点。もともとシンガポールの研究者は出国したがるものの、自国にアジアの研究者を呼んで研究会を行うことを忌避する傾向がある。また、同大学では学生の流動性が高いため、大学院生レベルでの研究会への参加がむずかしい状況にあり（それゆえ2010年度はポストドクレベルの若手研究者が参加した）、このあたりの問題をクリアできれば、今まで以上に強固な協力体制を築くことができる。

第二に、日本から参加する学生が留学生に偏りがちで、日本人のオルグがきわめてむずかしい点。このあたりの経緯については、2011年2月28日の『日本経済新聞』に「日本人学生、留学生との競争 委縮／大学国際化『内向き』に拍車」と題する投稿記事に詳しいが、今後とも日本人学生の本プログラムへの参加を促すよう工夫・努力を続けていきたい。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成22年度論文総数 21 本

うち、相手国参加研究者との共著 0 本

うち、本事業がJSPSの出資によることが明記されているもの 17 本

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入して下さい。)

8. 平成22年度研究交流実績概要

8-1 共同研究

従来、個別に行われてきたアジアの社会学者の研究教育交流をより形のあるものとし、しかもその成果を、世界社会学会議・横浜大会で世界に向けて発信できるようにするために、以下の異なる活動を同時並行的に行った。

アジア比較社会共同研究会の実施

2014年の世界社会学会議・横浜大会を睨み、アジアにおける社会学発展の歴史を比較の視点から総括する3年計画の研究会を実施した。今年度は「アジア社会学の歴史：その特徴とユニークさはどこにあるか？」History of Asian Sociologies: What are their Characteristics and Uniqueness?」（於ソウル、2010年12月）をテーマに共同研究を進め、その成果を報告しあった。

もともとは、日本での開催を予定していたが、各国の参加者が「アジア・バロメーターの研究会と一緒にした方が都合がよいし、何より若手研究者へのコメントを付けることが可能になる」というので、急きょ開催場所を韓国・高麗大学にした。なお、2010年12月18日に実施された共同研究会のプログラムは以下の通りである（すでにその論文の具体的な内容などについては、専用のホームページで公開してある）。

December 18 (Saturday), 2010

9:30-10:00 Registration

10:00 Opening Remark by Prof. In-Jin Yoon (Korea University)

10:10 Welcoming Remark by Prof. Shigeto Sonoda (GSII, UT)

10:20 Introducing Participants

10:20-11:40 Session 1: Development of Korean Sociology

Chair Prof. Tai-lok Lui (Department of Sociology, University of Hong Kong)

Myung Kyu Park (Department of Sociology, Seoul National University)

“History of Korean Sociology (tentative)”

Il Joon Chung (Department of Sociology, Korea University)

“The Rise of Public Sociology in South Korea: Beyond Critical & Policy Sociology”

11:40-12:40 Session 2: Development of Chinese and Hong Kong Sociology

Chair Chul-Kyoo Kim (Department of Sociology, Korea University)

Chunling Li (Institute of Sociology, Chinese Academy of Social Sciences)

“Ideological transformation and Research of Social Stratification in China”

Tai-lok Lui (Department of Sociology, University of Hong Kong)

“From Being the Other to Becoming the Local: Hong Kong's Sociological Exploration”

12:40-13:30 Lunch

13:30-15:00 Session 3: Development of Japanese, Taiwanese and Singaporean Sociology

Chair In-Jin Yoon (Korea University)

Shigeto Sonoda (GSII, University of Tokyo)

“Development of Japanese Sociology and Its Asian Connection”

Mau-kui Chang (Institute of Sociology, Academia Sinica)

“Constructing the History of Sociology in Taiwan”

Ern-Ser Tan (Department of Sociology, National University of Singapore)

“Singapore Sociology: Responding to Nation-building and Professional Demands”

15:00 – 15:20 Break

15:20-16:20 Session 4: Contemporary Issues of Asian Sociology

Chair Shigeto Sonoda (GSII, University of Tokyo)

Chul-Kyoo Kim (Department of Sociology, Korea University)

“Local Food Movement in South Korea: the Current State and Issues”

In-Jin Yoon (Department of Sociology, Korea University)

“Plurality and Solidarity: Multicultural Minority Groups and Multicultural Coexistence in Korean Society”

16:20 – 16:40 Break

16:40-17:40 Concluding Session and Business Meeting for Next Year

アジア・バロメーター共同研究会の実施

2003年から2008年まで蓄積されたアジア・バロメーターのデータベースを用い、今年

度は「比較研究のフロンティア」（於ソウル）をテーマとして共同研究会を実施した。上述のアジア比較社会共同研究会の翌日（2010年12月19日）に若手研究者による報告、4セッションを設け、それぞれの研究をめぐる相互討論を通じて切磋琢磨できる機会を提供した。

この参加者のほとんどは、夏のセミナー（2010年7月）に参加してデータセットの基本的性格やデータベース作成の意図、その学問的意義などについて理解してもらうよう心がけたため、報告にいたるまでのプロセスはきわめてスムーズだった。また、報告会でのコメントーターのコメントも有効で、若手研究者にとっては極めて有意義な研究会となった。

報告会で発表された論文のいくつかは、コーディネーターが編集する論文集に収録される予定となっており、その出版計画が本格化している。

なお、研究会のプログラムは以下の通り（その論文の具体的な内容などについては、すでに専用のホームページで公開してある）。

December 19 (Sunday), 2010

9:30-10:00 Registration

10:00-10:10 Welcoming Remark by Prof. In-jin Yoon (Korea University)

10:10-10:20 Explanation of the AB Workshop by Prof. Shigeto Sonoda (GSII, UT)

10:20-12:00 Session 1 Class Issues in East Asia

Chair Prof. Tai-lok Lui (Department of Sociology, University of Hong Kong)

Commentator Prof. Chunling Li (Institute of Sociology, CASS)

Qian Zhou (GSII, University of Tokyo)

"Reconsidering the East Asian Middle Class: Research Issues, Data Validation and Future Prospects"

Thung-Hong Lin (Institute of Sociology, Academia Sinica)

"How Class Matters in Four Chinese Societies: Social Inequality and Political Attitudes"

Mikito Terachi (GSAS, University of Tokyo)

"Upper Class People in East Asia: Is There the Possibility of Emergence of Gold-Collar Workers?"

Yan Zhu and Chuan Hong (Department of Sociology, Fudan University)

"Internal Political Efficacy of Middle Class in Transitional States: Comparing China and Vietnam"

Terence Chong (Institute of Southeast Asian Studies) <Paper Contribution Only>

"A Matter of Trust: Southeast Asian Middle Class Perspectives of the State"

12:00-13:00 Lunch

13:00-14:20 Session 2 State and Nation in Globalizing East Asia

Chair Prof. Mau-kuei Chang (Institute of Sociology, Academia Sinica)

Commentator Prof. Tai-lok Lui (Department of Sociology, University of Hong Kong)

Ja-young Nam (GSII, University of Tokyo)

"Does the Internet Promote Nationalism in East Asia?: A Comparative Research on the Correlation of Internet Use and National Identity"

Li-Hsuan Cheng (Graduate Institute of Sociology, National Sun Yat-Sen University)

"A Neo-liberal Turn? Examining the Attitudes toward Public Spending and Equality in Seven East Asian Societies"

Ji-yuan Zhang (Department of Sociology, University of Tokyo)

"Social Capital and the East Asian Welfare Society Model? Models?: Evidence from 2003-2008 Asia Barometer "

Break

14:40-16:20 Session 3 East Asian Family Values in Comparative Perspective

Chair Prof. Shigeto Sonoda (GSII, University of Tokyo)

Commentator Prof. Ern-Ser Tan (Department of Sociology, National University of Singapore)

Ji-ae Kim and Tae Bum Yoo (Department of Sociology, Korea University)

"A Comparative Study on the Determinants of Male attitudes toward Gender Affirmative Action in Asian Countries: Using AsiaBarometer 2006 Data"

Zong-Rong Lee and Michael H.H.Hsiao (Institute of Sociology, Academia Sinica)

"Familism, Social Capital and Civic Culture: A Multifaceted Test of Survey Data in Eleven Asian Societies"

Chuan Hong and Yan Zhu (Department of Sociology, Fudan University)

"Family Structure, Family Function and Child-rearing Value in China and India"

Jae In Lee (Department of Sociology, Korea University)

"A Comparative Study of the Determinants of Strength of Kinship Tie among China, Japan, and Korea"

Break

16:40-18:00 Session 4 Religion and Well-being in Cultural Diversity in East Asia

Chair Prof. Ern-Ser Tan (Department of Sociology, National University of Singapore)

Commentator Prof. In-jin Yoon (Department of Sociology, Korea University)

Gang-Hua Fan (Department of Social Psychology, Shih Hsin University)

"Does Religion Matter for East Asian's Psychological Well-Being?: Evidence from Japan, South Korea, and Taiwan"

Mathew Mathews (Institute of Policy Studies, National University of Singapore)

"Religious People in Asia: How they differ on Concern for Family and Community"

Akiko Ishioka (GSAPS, Waseda University)

"Who is dissatisfied with the Social Welfare System in East Asia?: Data Analysis of AsiaBarometer 2006"

8-2 セミナー

上述のように、7月にアジア・バロメーターに関する若手研究者対象のセミナー（韓国2名、中国2名、シンガポール2名、台湾2名、日本4名）を実施し、データセットの基本的性格やデータベース作成の意図、その学問的意義などについて理解してもらった。

その具体的な日程やスケジュールについては、別途報告した通りであるが、以下、これを再録する。

2010年7月11日(日) 日本到着（宿泊先：ホテルメッツ目白）

2010年7月12日(月)

- 午前9時半～ セミナーの趣旨説明（講師：園田）
参加者自己紹介（周、寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong）
- 午前10時～ 講義1) アジア・バロメーター：その狙い・方法・射程（講師：猪口、
受講者：周、寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong）
- 午前12時～ 昼食
- 午後1時～ 講義2) アジア・バロメーター統合データの形状（講師：園田、受講
者：周、寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong）
- 午後2時～ 実習1) 質問票を眺めて、仮説を作る（参加者：周、寺地、張、Lee, Kim,
Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong）
- 午後3時～ 講義3) アジア・バロメーターの利用事例(1)（講師：岸、受講者：周、
寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong）
- 午後4時半～ 実習2) データを加工してみる(1)（参加者：周、寺地、張、Lee, Kim,

Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong)

2010年7月13日(火)

午前9時半～ 研究論文構想発表会(1) (報告者：, Kim and Lee, Hong and Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong)

午前12時 昼食

午後1時～ 講義 4) アジア・バロメーターの利用事例(2) (講師：園田、受講者：周、寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong)

午後2時半～ 実習 3) データを加工してみる(2) (参加者：周、寺地、張、Lee, Kim, Hong, Zhu, Li, Cheng, Mathews, Chong)

2010年7月14日(水)

午前9時半～ 研究論文構想発表会(2) (報告者：周、寺地、張)

午後以降 帰国

8-3 研究者交流 (共同研究、セミナー以外の交流)

昨年来、実験的に行われてきたアジア社会学コンソーシアム(於東京)を継続・発展させ、グローバル化するアジアが抱えるアクチュアルな問題を、比較の視点からアプローチしている研究者を招聘した。その具体的なラインアップは、以下の通りである。

(1) 2010年10月26日 Fabian J. Froese氏(高麗大学助教授)

テーマ：“Foreign Professors in Asia: Empirical Evidence from Surveys in Japan, Korea, China, and Singapore”

(2) 2010年11月8日 Han Sang-jin氏(ソウル国立大学名誉教授)

テーマ：“Is the Chinese Middle Class Politically Conservative?”

(3) 2010年11月29日 潘允康氏(天津社会科学院社会学研究所研究員)

テーマ：“現代中国における<公平問題>：四都市調査(1997-2006)の知見から”

(4) 2010年12月9日 Michael Anti氏(南方都市报コラムニスト)

テーマ：“’Structural Fallacy’ of Japanese Media’s Reports on China: My Observations in Tokyo”

(5) 2011年2月18日 Michael H.H. Hsiao氏(中央研究院社会学研究所所長)

テーマ：“Comparing Political Trust in Hong Kong and Taiwan”

(6) 2011年2月18日 Fu-chang Wang氏(中央研究院社会学研究所副所長)

テーマ：“Rethinking the Ethnicity Issues in Taiwan's Democratic Transition”

以上のような形で、実に盛りだくさんの活動ができたのも、各国のコーディネーター及び協力機関のキーパーソンと十分なコミュニケーションをとったからであり、特に、本プログラムが採用された直後、韓国(高麗大学 Yoon 教授)やシンガポール(国立シンガポール大学 Tan 教授)に行って、本プログラムの目的や活動内容をめぐって意見交換をした

からであり、その後中国・香港（香港大学 Lui 教授）を園田が訪問したり、台湾の研究者（上述の Hsiao 所長や Wang 副所長）を東洋文化研究所に招聘したりして、目的意識を共有してきたからに他ならない。

9. 平成22年度研究交流実績人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元		日本	中国	韓国	台湾	シンガポール	合計
		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	
日本 <人/人日>	実施計画		1 / 3	5 / 15	0 / 0	0 / 0	6 / 18
	実績		1 / 3	7 / 26	0 / 0	1 / 3	9 / 32
中国 <人/人日>	実施計画	4 / 12		4 / 12	0 / 0	0 / 0	8 / 24
	実績	2 / 8		4 / 16	0 / 0	0 / 0	6 / 24
韓国 <人/人日>	実施計画	4 / 12			0 / 0	0 / 0	4 / 12
	実績	2 / 8	0 / 0		0 / 0	0 / 0	2 / 8
台湾 <人/人日>	実施計画	3 / 9	0 / 0	4 / 12		0 / 0	7 / 21
	実績	4 / 15	0 / 0	3 / 12		0 / 0	7 / 27
シンガポール <人/人日>	実施計画	3 / 9	0 / 0	3 / 9	0 / 0		6 / 18
	実績	2 / 8	0 / 0	2 / 8	0 / 0		4 / 16
合計 <人/人日>	実施計画	14 / 42	1 / 3	16 / 48	0 / 0	0 / 0	31 / 93
	実績	10 / 39	1 / 3	16 / 62	0 / 0	1 / 3	28 / 107

9-2 国内での交流実績

実施計画	実績
5 / 12 <人/人日>	6 / 18 <人/人日>

10. 平成22年度研究交流実績状況

10-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	2010年	研究終了年度	2012年		
研究課題名	(和文) アジア比較社会共同研究会 (英文) Joint Research on Comparative Sociology of Asia						
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文)・園田茂人・東京大学大学院情報学環・教授 (英文) SONODA Shigeto, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, University of Tokyo, Professor						
相手国側代表者 氏名・所属・職	尹仁鎮・高麗大学校社会学科・教授 呂大樂・香港大学社会学系・教授 蕭新煌・中央研究院社会学研究所・所長 Tan Ern Ser・国立シンガポール大学社会学部・准教授						
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流						
	派遣先	日本	韓国	中国	台湾	シンガポール	合計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本 <人/人日>	実施計画					0/0
		実績	1/4				1/4
	韓国 <人/人日>	実施計画	2/6				2/6
		実績					0/0
	中国 <人/人日>	実施計画	2/6				2/6
		実績		2/8			2/8
	台湾 <人/人日>	実施計画	1/3				1/3
		実績		1/4			1/4
	シンガポール <人/人日>	実施計画	1/3				1/3
		実績		1/4			1/4
	合計 <人/人日>	実施計画	6/18				6/18
		実績		5/20			5/20
	② 国内での交流 0/0 人/人日						
22年度の研究交流活動	2014年の世界社会学会議・横浜大会を睨み、アジアにおける社会学発展の歴史を比較の視点から総括する3年計画の研究会を実施した。今年度は「アジア社会学の歴史：その特徴とユニークさはどこにあるか？」History of Asian Sociologies: What are their Characteristics and Uniqueness?」(於ソウル、2010年12月)をテーマに共同研究を進め、その成果を報告しあった。						
研究交流活動成果	プロシーディングスを刊行し、すでに提出論文を専用ホームページで公開している。来年度も継続的に研究を続け、最終的には英文による論文集の刊行を計画している。						
日本側参加者数	1名 (13-1 日本側参加者リストを参照)						
(韓国)側参加者数							

3 名	(13-2 (韓国) 側参加者リストを参照)
(中国) 側参加者数	
2 名	(13-3 (中国) 側参加者リストを参照)
(台湾) 側参加者数	
1 名	(13-4 (台湾) 側参加者リストを参照)
(シンガポール) 側参加者数	
1 名	(13-5 (シンガポール) 側参加者リストを参照)

整理番号	R-2	研究開始年度	2010年	研究終了年度	2012年		
研究課題名	(和文) アジア・バロメーター共同研究会 (英文) Joint Research on AsiaBarometer						
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 園田茂人・東京大学大学院情報学環・教授 (英文) SONODA Shigeto, Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, University of Tokyo, Professor						
相手国側代表者 氏名・所属・職	尹仁鎮・高麗大学校社会学科・教授 劉欣・復旦大学社会学系・教授 蕭新煌・中央研究院社会学研究所・所長 Tan Ern Ser・国立シンガポール大学社会学部・准教授						
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流						
	派遣先	日本	韓国	中国	台湾	シンガポール	合計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画	5/15				5/15
	<人/人日>	実績	5/20				5/20
	韓国	実施計画					0/0
	<人/人日>	実績					0/0
	中国	実施計画	4/12				4/12
	<人/人日>	実績	2/8				2/8
	台湾	実施計画	4/12				4/12
	<人/人日>	実績	2/8				2/8
	シンガポール	実施計画	3/9				3/9
	<人/人日>	実績	1/4				1/4
	合計	実施計画	16/48				16/48
	<人/人日>	実績	10/40				10/40
	② 国内での交流 0/0 人/人日						
22年度の 研究交流活動	2003年から2008年まで蓄積されたアジア・バロメーターのデータベースを用い、今年度は「比較研究のフロンティア」(於ソウル)をテーマとして共同研究会を実施した。上述のアジア比較社会共同研究会の翌日(2010年12月19日)に若手研究者による報告、4セッションを設け、それぞれの研究をめぐる相互討論を通じて切磋琢磨できる機会を提供した。						
研究交流活動 成果	プロシーディングスを刊行し、すでに提出論文を専用ホームページで公開している。報告会で発表された論文のいくつかは、コーディネーターが編集する論文集に収録される予定となっており、その出版計画が本格化している。						
日本側参加者数	5名 (13-1 日本側参加者リストを参照)						
(韓国)側参加者数	2名 (13-2 (韓国)側参加者リストを参照)						
(中国)側参加者数							

2 名	(1 3 - 3 (中国) 側参加者リストを参照)
(台湾) 側参加者数	
2 名	(1 3 - 4 (台湾) 側参加者リストを参照)
(シンガポール) 側参加者数	
1 名	(1 3 - 5 (シンガポール) 側参加者リストを参照)

10-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 アジア・バロメーターの使い方：初歩から応用まで
	(英文) JSPS AA Science Platform Program How to Use AsiaBarometer Dataset
開催時期	平成22年 7月12日 ~ 平成22年 7月14日 (3日間)
開催地(国名、都市名、 会場名)	(和文) 日本、東京、東京大学東洋文化研究所
	(英文) Japan, Tokyo, Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 猪口孝・新潟県立大学・学長
	(英文) INOBUCHI Takashi, University of Niigata Prefecture, President
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
日本 〈人/人日〉	A.	4 / 12
	B.	
	C.	2 / 6
韓国 〈人/人日〉	A.	2 / 8
	B.	
	C.	
中国 〈人/人日〉	A.	2 / 8
	B.	
	C.	
台湾 〈人/人日〉	A.	2 / 8
	B.	
	C.	
シンガポール 〈人/人日〉	A.	2 / 8
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	12 / 44
	B.	
	C.	2 / 6

A.セミナー経費から負担

B.共同研究・研究者交流から負担

C.本事業経費から負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>データセットをもっているからといって、共同研究会が簡単に組織できるわけではない。日本国内でもそうだが、アジアの諸地域に関心をもつ若手研究者が統計分析手法を持ちあわせていなかったり、逆に統計は使いこなせるものの、アジアの諸事情に疎いために分析のための手がかりをもたない——あるいは分析できたとしても解釈のための糸口を見出し得ない——若手研究者も少なくないからである。また、データセットが作られた背景や質問の意図などが説明されないことには、プロの研究者でも二次データを利用するのはむずかしい。</p> <p>そこでアジア・バロメーターというデータセットの特徴や使い方をレクチャーし、そのデータの特性を理解した上で本格的にアジア比較社会研究のための導入としたい。また、昨年度と異なる若手研究者を招聘することで、研究者層の厚みをつけたい。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>アジア各地の若手研究者がアジア・バロメーターという壮大なプロジェクトの存在を知った。また、彼らがこのデータセットを用いて研究を行い、論文を執筆することに対するモチベーションが高まった。12月の高麗大学での報告会に向けて、参加者がどのような作業をしなければならないかについて明確なビジョンを持ち、統計的な手法のマスターもさることながら、アジア各地の情報を入手し、うまく仮説を生み出したうえで比較研究を行うことの意義や、その具体的な進め方について習得した。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>アジア・バロメーターを主導してきた猪口孝教授に開催責任者となってもらい、キックオフの際のスピーチをしていただいた。またデータの形状やデータを用いてできる成果の例をコーディネーターの園田茂人教授が説明した。本セミナーに参加したのは、韓国、中国、台湾、シンガポールの相手国側代表者から推薦された若手研究者（韓国は修士課程学生2名、中国は博士課程学生2名、台湾は有職の若手研究者2名、シンガポールは有職前のポスドク研究者2名、それに日本の修士・博士課程学生3名と有職の若手研究者1名）で、彼らはみな、アジア・バロメーターの意図するところ、データセットの概要、従来の研究蓄積とその特徴などについてのレクチャーを受けた後、統合データセットをもちいて、12月の報告会に向けてどのような研究成果を発信する予定かを各自が報告し、相互に討論を行った。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>国内旅費</p> <p>外国旅費</p> <p>その他経費</p> <p>外国旅費・謝金に係る消費税</p>	<p>金額</p> <p>326,560円</p> <p>676,585円</p> <p>59,368円</p> <p>33,828円</p> <p>合計 1,096,341円</p>
	<p>()国 (地域)側</p>	<p>内容</p>	<p>金額</p>

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先		日本	韓国	中国	シンガポール	計
派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
日本 <人/人日>	実施計画		0/0	1/3	0/0	1/3
	実績		1/2	1/3	1/3	3/8
台湾 <人/人日>	実施計画	0/0				0/0
	実績	2/7				2/7
<人/人日>	実施計画					
	実績					
合計 <人/人日>	実施計画	0/0	0/0	1/3	0/0	1/3
	実績	2/7	1/2	1/3	1/3	5/15
②	③ 国内での交流		0 人/人日			

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
東京大学情報学環・教授・園田茂人	韓国・ソウル・高麗大学校	2010年4月17日～18日	高麗大学校の尹仁鎮教授と今年度実施する研究会の具体的な様式、進め方についての打ち合わせ
東京大学情報学環・教授・園田茂人	シンガポール・シンガポール国立大学	2010年4月18日～30日	国立シンガポール大学での若手研究者の派遣者候補、および来年度実施予定のアジアバロメーター研究会の進め方についての打ち合わせ
東京大学情報学環・教授・園田茂人	中国・香港・香港大学社会学系	2010年6月13日～15日	香港大学社会学系の呂大樂教授と再来年度の比較社会共同研究会を主催してもらう際の、具体的な協力態勢についての打ち合わせ
中央研究院社会学研究所・所長・Michael Hsiao Hsin-Huang	日本・東京・東京大学東洋文化研究所	2011年2月20日～22日	東洋文化研究所との共同ワークショップへの参加、およびアジア社会学コンソーシアムでの講演
中央研究院社会学研究所・副所長・Wang Fu-Chang	日本・東京・東京大学東洋文化研究所	2011年2月20日～23日	東洋文化研究所との共同ワークショップへの参加、およびアジア社会学コンソーシアムでの講演

1 1. 平成22年度経費使用総額

	経費内訳	金額 (円)	備考
研究交流経費	国内旅費	773,180	
	外国旅費	2,963,585	
	謝金	36,000	
	備品・消耗品購入費	423,238	4 円の残額発生
	その他経費	658,517	
	外国旅費・謝金に係る消費税	145,476	
	計	4,999,996	4 円の残額発生
委託手数料		500,000	
合 計		5,499,996	4 円の残額発生

1 2. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額 (円)	交流人数<人/人日>
第1四半期	459,469	3/8
第2四半期	1,089,690	14/50
第3四半期	611,033	15/60
第4四半期	2,839,804	2/7
計	4,999,996	34/125